

帰国子女教育研究

—教育の対象化の視座から—

佐々木 棟明 林 正太

目 次

要 約	138
はじめに	138
I 本校における帰国子女教育研究の歩み	139
II 本 論	
1 教育の対象化	140
(1) 最終的対象化としての教育の国際化	
(2) 対象化の条件	
2 研究の目的	142
3 研究の方法	142
4 アンケートの分析と考察	143
(1) カリキュラムの対象化	
(2) 教授・学習方法の対象化	
(3) 評価の対象化	
(4) 帰国生と一般生徒の相互啓発	
5 本校の入試制度と潜在的カリキュラム	151
(1) 本校の入試制度	
(2) 潜在的カリキュラム	
III 総合的考察と今後の課題	
1 帰国生の教育問題と本校の教育改革	152
2 教育の独自性と国際化	153
3 今後の課題	154
引用および参考文献	155
資 料	156

要 約

本校の帰国子女卒業生のアンケート調査によれば、彼らは本校の教育には満足できるものが多かったと述べている。その一つの要因は本校が海外の現地校などと類似した比較的自由的な校風をもっていることによると考える。しかし、その背景をなす制度としての、全校の生徒数に占める彼らの割合が一割弱であり、そして一般生徒の中に混入して生活しているという本校の特殊な受け入れ体制にも関係していると思われる。

帰国子女教育を具体的手がかりとして本校の教育を世界の教育の中で対象化していくと、学校の構成要素としてのカリキュラム、教授、評価の中に検討すべきものが多くあることがわかる。それらは帰国卒業生のアンケートでの指摘にも見ることができる。

しかしそれらの検討、改善は、日本の教育・文化的文脈における本校の特殊性を考慮して進める必要がある。

キーワード 帰国子女教育、教育の対象化、文化的文脈、学習共同体

はじめに

帰国子女受け入れから20年、混入方式と言われる普通学級での本校の帰国子女教育も最近一つの転換期にさしかかっているように思う。

教師も一般生徒も帰国生をあまり意識しなくなるほどに彼らが本校にとけ込んでいる。したがって、そこには帰国生に特有の問題など存在しないかのような様相を呈しているのである。長期間にわたり、帰国生を受け入れてきたために彼らが本校の一部を構成していることがごく自然なことになり、全体の中で帰国生を特別に意識することもほとんどなくなってきているのである。

こうした現象を助長するように、帰国生としての彼ら自身の中にも変化が見られる。それは従来のようないわゆる帰国生らしさをもった生徒が少なくなってきているのである。海外の日本人学校に在籍する生徒、親はもちろんのこと、現地校に在籍する生徒、親の側にも、やがて日本での教育を受けざるを得ないと考え、それなりの措置を講じているためか日本の教育にあまり抵抗なくとけ込めるようになってきていると思われるのである。

20年前の本校の帰国子女受け入れ準備委員会の資料を見ると、当時、外国で教育を受けた子どもたちが入学してくるのだという緊張感が伝わってくる。それから20年、教師も生徒も彼らの影響を受けるとともに、社会状況もすっかり変わった。多くの日本人が海外旅行をし、地方においてもそこで働き定住している外国人が目につくようになってきている。

こうした社会の変化、人々の海外への関心の高さの中で、これまでの帰国生の受け入れを改めて検討し、そこから本校の教育改革の示唆を得ることは十分に意味のあることであると考えられるのである。

I 本校における帰国子女教育研究の歩み

本校における帰国子女教育の受け入れは昭和51年の4月に始まる。その前年までの受け入れ準備委員会での調査に始まり、そしてこれからの研究を次のように3期に分ける。

なお、第2期は第1期を包摂し、第3期は第1、2期を包摂するものである。

第1期（適応教育期）

受け入れ当初、帰国子女ということばさえ世間一般には理解されにくいものであった。本校においても、長期間にわたり異国で教育を受けてきた彼らを受け入れることに戸惑いがあった。その様子は「海外帰国子女受け入れ計画準備委員会資料」によって知ることができる。その中には、学力差を解消するための補習授業や生活への適応のための教育相談などを計画していたことが分かる。学校での取り組みの基本的な考えは、彼らが一日も早く本校の学習および生活に適応できるように支援することであった。

まず、受け入れの翌年には、「普通学級編入方式の海外帰国子女教育—実体と問題を中心として—」にまとめられた。通学あるいは日本の生活・風習などの生活上の適応、放課後の国語を中心とした補習授業、親との面接やアンケート調査などについて報告している。

そしてその翌年には「本校帰国生徒の学習適応に関する実態の分析」²⁾としてまとめられた。かれらの学習適応に関して一般的な傾向を取り出すことはできないとしながらも、在留期間が3年未満は標準学力検査の得点が高いこと、5年以上になると英語だけがずばぬけてできるものの成績の上昇は2年生頃から良くなるなどのことを指摘している。

続いて、「帰国生徒の生活の適応について」³⁾がまとめられた。そこでは、生活適応を身体的、心理的、社会的適応と学習適応に分類し、個々の生徒について調査している。

第2期（特性伸長教育期）

帰国子女の第1期卒業生を送り、学校としての受け入れに対してある種の自信を持つようになってきた。またこのころから、帰国子女ということばが広く社会で理解され始めるようになった。それと同時に帰国子女が急激な増加傾向を示すようになった。

本校においては教師はもちろんのこと、生徒も彼らを特別視することは薄れ、帰国子女教育は当初の環境への適応教育から、海外で培った特性を伸ばすような指導へと変わっていった。帰国生らしさが歓迎されるようになり、彼らのそうした特性を積極的に伸ばしていこうという機運が生まれてきた。

この期間における本校の取り組み方は、校内研究協議会によって議論されたり、教員へのアンケート調査などをもとにして検討されている。また、本学の海外子女教育センターから講師を招いての研究会も開いている。

かつての帰国生を対象とした学校をあげての特別の指導もなくなり、各教科担任あるいはクラス担任の指導にゆだねられていった。その背後には、彼ら自身特別扱いを望まなくなったことも一つの要因であった⁴⁾。

第3期（学校変革期）

このような経緯を経て、本校の帰国子女教育は今日、第3期の時代に入っていると認識している。長い間特別の指導をしてこなかったことへの反省もあり、問題はないといってもこのままではいけないという機運が生まれてきているのである。

その取り組みは、帰国子女教育をどうするかではなく、かれらの教育を一つの切り口として学校全体を世界の学校を視野に入れて検討しようというのである。そうすることが結果的に彼らにより充実した学校教育を提供できると考えるのである。

Ⅱ 本 論

1 教育の対象化

(1) 最終的对象化としての教育の国際化

近年、国立の附属学校はもちろんのこと、公立の小、中学校においても公開研究授業が盛んに行われるようになってきた。どの研究会にも他校から多くの教師が参加しているようである。忙しい職務の合間をぬって、しかも遠距離もいとわず参加する理由はどこにあるのであろうか。それは例えば、一つの教科指導の観点からみると、これまでの自分の教科の指導方法を他校の教師の教科指導の中において対象化することを目的としていると考えることができる。それでは指導方法の対象化とはどのようなことを指すのであろうか。

毎日の授業もある指導水準に達すると、さほど苦もなく行うことができるようになる。一定の高い水準での授業ができるということは勿論それ自体問題はないのである。ところがふとこのような授業でいいのかという反省が生まれる。そうすると自分の授業方法を検討するために、まず他人の授業を研究する必要性を感じるのである。

このようにこれまでは意識下であって、改めて考えてもみなかった自分の指導方法を、他の教師の指導方法の中において、自覚的に取り上げ、再検討することを指導方法の対象化と呼んでおく。この対象化によってはじめて、これまでの自分の指導方法は質的变化を遂げる可能性が生じる。

このような指導方法の対象化と同じようにして、学校における教育も対象化される。それはまず、その学校の近隣の地区において対象化される。教育委員会などの支援の下に行われる各種の教育研究はこのような対象化をねらったものと考えることができる。すなわち、自分の学校における日々の教育活動に満足するのではなく、地域の学校を含めた中で自覚的に自らの学校のあり方に反省を加え、新たな教育体制の再構築を願い、教育の質的向上を目指すのである。

このようにして教育は次々と対象化され、最後には世界の学校、教育を視野においてわが国のあるいは自らの学校の教育のあり方を再考するところまでいく。この最後の対象化が教育の国際化と考えることができよう。

数学の用語で表現するならば、一つの集合が次はより大きな集合の要素となっていく過程と見えよう。

ところで、例えば、教師になりたての者は自らの指導方法を対象化しようとは考えないし、考えることもできない。したがって、対象化にはそれを可能とする条件が必要なが分かる。

次に世界の教育の中での教育の対象化を可能にする条件について考える。

(2) 対象化の条件

教育の対象化の条件としては、次のようなことを考えることができる。

① 教育体制の確立

明治の学制発布以来、わが国は一貫して学校教育を中心とする教育の向上に腐心し、今日の隆盛を見るに至った。もちろん教育の重視はなにも明治の時代に始まったものではない。江戸時代にも、すでに庶民の教育機関としての寺小屋の普及に見られるように、教育の重要性は国民に広く理解されていた。

そして、戦後の50年間、こうした教育を重視する国柄を反映し、世界的にも希有の教育立国として教育体制は一層充実し、それに基づく教育活動が展開されてきた。教育の対象化にはこうした一つの教育体制による長期の教育活動の展開が必要なのである。もし、独自の体制が確立していないと、他の教育の中で対象化されることなく、吸収され、独自性を失ってしまう。

② 社会の変化

戦後、日本の経済力は急激にその力をつけ、諸外国との貿易摩擦を生じさせる程にまでになった。特に終戦後の混乱期を思うと、今日の事態は当時の想像を全く越えたものに違いないのである。その背後には、経済活動はもちろんのこと、政治、文化、スポーツ等における世界を対象として活躍する多くの日本人の姿があった。こうした活動を支えるために、彼らは教育を必要とする彼らの子女と共に海外に長期に滞在することを迫られた。そして子どもたちは滞在するその国で教育を受けるが、やがて親の帰国と共にわが国の教育を受けなければならなくなる。ここに、帰国子女教育の必要が誕生した。

彼らを受け入れることによって、日本の教育だけを受けてきた子どもの教育を前提としていた学校は、これまでの教育のあり方を再検討せざるを得なくなったのである。このようにして生じた教育の対象化すなわち国際化は、学校が自ら望んだものではなく、国際社会の変化によってもたらされたものなのである。

③ 教師および生徒の意識変化

わが国の強力な経済力は、貨幣の世界的基準としてのドルに対する円の価値の増大を生じさせた。1ドル360円であった円の価値は急騰し、一時、1ドル80円台までになった。この円高は多くの国民の海外渡航を可能にした。もちろんそのような恩恵に浴することは教師とて例外ではなかった。

本校においては、夏季休暇の利用に関してみただけでも、海外旅行をする教師の数は、毎年5～6名前後に及んでいる。それに加えて、本校では海外の日本人学校で3年間勤務した者が2名おり、また現在1名が海外の学校に勤務している。さらに、英語研修などにおける1か月以上の長期の海外研修者が3名いる。

学期毎の長期の休暇は、教師だけでなく生徒の海外旅行にも利用されている。かつての在留国への再渡航あるいは短期の語学研修などの目的で、海外旅行をする生徒が多数いる。

かつては世界的視野での教育の検討は、主に文献に頼らざるを得なかった。しかし、今日単なる文献上のこととしてではなく、自分の身を海外に置いたという体験のもとにおこなわれる

のである。ここに、これまでの教育の対象化の違いを見ることができる。

④ これまでの本校の帰国子女教育研究

先に述べたように、帰国子女の受け入れ当初は、その教育は彼らを本校に適応させようとする適応教育に力を入れていた。その後、この適応教育は彼らの特性を伸ばそうという教育に移行していった。今、教育の対象化の視座から帰国子女教育を論じることができるのは、こうした研究があったからである。

こうして、本校の帰国子女教育は今や世界の教育を視野にいれて自らの学校の教育のありかたを検討する条件がそろったと言えるのである。

2 研究の目的

本校での帰国子女の受け入れは、世界的視野での教育の対象化を進める大きなきっかけになったことは間違いない。これは学校が自らの意志で望んだものではなかったが、これまでの国内での教育研究を世界に開いたものにする起爆剤になった。こうした事態に至ったことを我々は幸運であったと見るべきであろう。

現在、本校では帰国子女が特別意識されることもなく、他の一般生徒の抱える問題以上に取立立てて検討する必要性のある問題は生じていないといえよう。

しかし、このことは本校の教育がこのままでいいと思っているということではない。より充実した帰国子女教育を実現するためにはさらなる努力が必要であると認識している。

受け入れから20年、約300名の帰国子女の卒業生を送り出している。特別問題がないこと、それが即我々の教育の妥当性を示すものと考えのではなく、この20年間の反省を踏まえ、もう一度初心に帰って帰国子女教育の検討が必要と考えた。そして、基本的な方針として至ったのは卒業生の目を通して、本校の教育全体をを検討することであり、そのことが帰国子女教育の充実につながると考えたことである。

したがって、本研究の目的は帰国子女教育を切り口とした教育の国際化の観点からのこれまでの本校の教育のあり方を点検し、そして今後の本校の教育のあり方への問題を提起することである。

3 研究の方法

われわれは学校の構造を問題にしている。そこで、学校の構造の重要な要素としてのカリキュラム、教授・学習、および評価の三つにわけて検討することにする⁹⁾。

まず、この三つのカテゴリーを念頭において、本校の帰国子女卒業生へのアンケートを作成した(資料1)。当初、回答の利便および回収率に配慮し、各項目に選択肢を設けた。しかし、広く多角的に彼らの率直な意見を聞くために最終的には自由記述形式に改めた。アンケートの対象者は昭和63年から平成6年度の10年間における本校の卒業生で、住所の確認できた125名である。

次に、当時帰国生と中学時代を過ごした一般の卒業生100名に対してもアンケートをとった(資料2)。四項目からなる自由記述形式とした。一般の生徒は帰国生をどのように受けとめ、何を学びとっていったのかを知るためである。

そして、最後が本校の教官24名を対象とするアンケートである（資料3）。帰国生を受け入れることによって、本校の教員の教育観や指導法、あるいは子ども像などがどのように影響を受けたか、そして学校の何が変わったかを知るためである。アンケートは1995年7月に実施された。

以上の三つのアンケートを分析し、これまでの本校の教育のあり方を反省し、これからの教育のあり方を考察する。

4 アンケートの分析とその考察

アンケートの回答があったのは、帰国子女の場合、34名である。30名分が住所不明で返送されてきた。したがって、実質95名に対して34名の回答率ということになる。回答してくれた卒業生は、紙面いっぱい多方面に渡って答えている。

一般の卒業生では、3名が住所不明で返送され、回答者は14名であった。アンケートの内容の問題もあってか、予想外の低い回答率であった。教員では15名が回答した。

次にカリキュラム、教授・学習、評価のそれぞれの観点からアンケートを分析しそして考察する。尚、アンケートの集計結果については、資料4、5、6を参照して欲しい。

(1) カリキュラムの対象化

カリキュラムの概念は多様化している⁹⁾が、本稿ではカリキュラムとは「教育目標に応じて内容を選択整理し、指導の順序に配列したもの」と考えておく。

アンケートの分析

教師側から：

① 国情の違いによるカリキュラム

戦火を逃れるようにして帰国した生徒や、逆に貧しい一般国民とは隔離されたような生活をし、日本では考えられないような贅沢な環境におかれた生徒の話などから、カリキュラムは各国の実状に応じて編成していかざるを得ないことを実感したという指摘がある。

また、様々なメディアによって理解しているつもりであった世界の認識が、現実に自分の目の前にいる生徒の体験した話を通して、世界には様々な文化、習慣があり、様々な考えの人間がいることを身をもって実感し、そうした異質のものを相互に認め合うような、広い視野からの教育の必要性を感じている。それが逆に、今まで改まって考えても見なかった、自分自身の中の日本の文化の見直しを迫り、教育にたずさわるものとして、カリキュラムに対する考えが狭かったことを感じている者もいる。

② 教科・学力以外の教育の重視

カリキュラムというと、とかく教科の枠内で考え、学力に結び付けて考えがちであるが、それ以外の教育の重要性を指摘している。いわば教育を多角的にとらえていく必要性の指摘である。その一つが、帰国生が学んだ国々では自国の芸術・文化へのこだわりをもつ教育があるというのである。受験一本やりと言われかねないわが国の教育への反省としてとらえている。

③ 個に応じたカリキュラム

そして、国によって教育事情が違うように、生徒もそれぞれの独自の特性、能力を持ってい

るのだから、これからのカリキュラムは一人一人の成長を支援するという立場に立ち、これまで以上に個人に目を向けたものでなければならないと感じている。

帰国生は、本校の教師に対して、これまで当たり前だと思っていたことが実は少しも当たり前のことではないことを知らせているのである。

生徒側から：

① 授業内容

アンケートの第一項目に「授業内容について（水準、進度など）」の質問があるが、多くの卒業生が本校の授業内容は高度であったと受けとめている。しかし、それを積極的に受け入れ自らの努力によって対応していったようである。

そして授業への満足度は、アンケートの第六項目「本校の教師像について」における彼らの本校教員に対する高い評価からもうかがえる。

② 教科外活動

学校行事

教科外の学校行事を、帰国生のほとんどが肯定的にとらえていた。教室での授業とは異なり、自分らしさを発揮できるところ、一体感を味わえるところとして高く評価している。そうした背景には、生徒による行事の自主的運営にあるようである。

本校の大きな学校行事は、春の校外学習に始まる。一年生はスポーツを中心とし、生徒同士の親交を深めることを目的として行われる。二年生は田植えなど、その地方の生活に根ざしたことを体験しようとする体験学習を中心としている。そして、三年生は奈良・京都への修学旅行である。三学年とも3泊4日で同時期に実施される。

この校外学習は「海外の学校では体験しなかった」、「たいへん楽しい」ものとして受けとめている。

そして、秋の運動会である。もちろん個人競技もあるが団体競技も多く、それを「クラスの交流、団結を深めるもの」として好意的に受けとめている。このような受けとめ方は、日本人学校に在籍していた生徒のみならず、現地校の経験しかない生徒にも共通に見られた。

運動会に続いて行われる、文化研究発表会に対しても高い評価をしていることがわかる。特に、夏休みを利用して作成される自由研究部門の研究・作品に大いに刺激を受けていたようである。また、クラス単位で行われる合唱コンクールもクラスの仲間意識を高め、楽しい思い出として残っているという。

他に、数年前に廃止された弁論大会も彼らには、自分を主張する場として、相手を理解する場として印象に残っているという。

部活・クラブ活動

海外の学校では日本でのような全体で活動するクラブ活動のようなものはなかったという生徒が多い。そのせいもあってか本校での部活・クラブ活動は自由で楽しいものだったという印象を持っている生徒が多くいる。特に運動部に所属していた生徒は上級生や顧問との信頼関係があったことをあげ、クラブ活動を評価している。本校の部活・クラブ活動は民主的でしかも自由で各自がのびのびと行っていて米国のそれと似ているという生徒もいる。

考 察

① 授業の内容と水準について

教師側のアンケートでは、本校の教育水準について触れているものはほとんどなかった。それに対して、帰国生の方では本校の授業の水準が高かったとし、そのことを積極的に受け入れ、努力していった様子がうかがえる。彼らがどのようにして、未習の内容を学習し、さらに本校の教育内容に対応していったかは今後の研究課題である。

帰国生は教育内容にある程度の高度さを求めているようすがうかがえる。本校では教科書を中心としながらも、各教科においてそれを発展させた内容が扱われることが多い。その教科の担当者によりかなり個性的な授業にもなっているといえよう。そのような内容は帰国生にも一般生にも区別のない内容になり、知っていればできるのではなく、考える必要のあるものになっているのだろう。そうしたことに、彼らが本校の授業を評価する理由があると考えられる。

② 教科の新設と従来の教科との関連

グローバルなカリキュラムとしては、環境問題や国際化に関連する内容を織り込んだ、これまでの教科の枠を越えた教科が必要になることは確かであろう。すでに新しい教科として実践している学校もあるが、本校ではいまだ着手していない。選択教科の枠内で、実践してみたいという案に留まっている。いずれのアンケートの回答にも見られなかったが、本校としては検討して行かなければならない重要課題である。

一方でこの新教科の増設によって起こる諸問題も予想される。その一つがその新教科に使われる時間によって、他教科への時間数の配分がこれまでより減少することである。内容を削減するか、それが不可能ならば短時間でできる指導方法を考えるしかない。

本校では近年、生徒の学力の低下が話題にされ、これまで以上に内容の消化に時間がかかるようになってきたと言われている。このような問題との関連でカリキュラムを検討していく必要がある。必要な教科を増やす以上、これまでのものをどうするかは議論は十分に検討されなければならない。

③ カリキュラムの個別化の問題

カリキュラムは一つの学校に一つ作成されるものであり、生徒の能力、進度に応じているわけではない。しかし、これからはいくつかのカリキュラムが用意され能力や進度に応じたものを考える必要があるのかもしれない。確かに多様な能力や個性を持つ生徒に対して同一内容を同一方法で指導することを前提としていては生徒の人権を尊重しているとはいえないであろう。ここに、帰国生の不満が見られる。もちろんこのような問題は帰国生に限った問題ではない。難しい問題であるが、カリキュラムの個別化は検討されなければならない。

④ 団体行動としての学校行事、クラブ活動

学校教育は教科の指導を中心とするが、それだけではない。教科外活動としての一連の学校行事が帰国生にこれほど好意的に受けとめられているのは意外であった。そこでは知識の積み重ねを必要とすることもなく、育った環境に影響されることもなく、対等に一般生徒と交流できた喜びを語っている。そして、生徒の自主性を尊重する本校の行事へ、海外での体験をもとに違和感なくとけ込めたというのである。

ところで、公立、私立の学校から本校への転勤者は、ほぼ例外なく本校の生徒指導に一種の戸惑いを感じるという。

それは、本校の生活指導、学校行事における生徒指導が、他校のそれに比べて、いわば甘いと感じるようなのである。例えば、下校時刻の不徹底、校内の掃除の不徹底などがそうである。しかし、それでも全体として大きく崩れることなく、それなりの形態を維持しているのである。よく校則の厳しさがマスコミに取り上げられるが、本校での状況はそれらとはかなり異なるものであることはアンケートの校則に関する回答からもわかる。

そして、教師側にもそれを徹底させようとする雰囲気欠けている。服装に関しても大きな乱れはないものの指導面で寛容なところがある。また制服は廃止も含めて生徒会の自主的な判断にまかされているが、現在のところ制服を支持する生徒が多数を占めている。

学校制服あるいは学校清掃は日本の伝統的な教育様式⁷⁾であるが、国際化の中で再考を迫られるのではないか。

また生徒が教官室で教師と気楽に話し合っている光景などは本校の特徴の一つとなっている。ある意味では、すでに本校は国際化しているといえるのである。

(2) 教授・学習過程の対象化

アンケートの分析

教師側から：

① 授業のスタイル

最近ではT、Tなどを実践している学校も見られるようになってきているが、やはり授業の基本的なスタイルは一人の教師による一斉指導であろう。この形態が最善のものと思っているわけではないが、クラス人数の多さ、教員の少なさなどから依然として一斉授業が主流である。その中で、個人への配慮を心掛けてもおのずと限界がある。このような現在の一斉指導に一考すべき点があることを帰国生の話を通して実感している。

また、個人的なものとして、自分の話し方を反省させられたという教師もいる。それは、日本語を良く理解できない帰国生に配慮して話したことが、他の一般の生徒にも同様な配慮をする必要があることを自覚したというのである。

② 帰国生を特別視しない

三種類のアンケートの回答に共通していたものに、帰国生を特別扱いしないということがある。もちろん個人差にもよるが、特に本校のように混入方式をとっている場合、彼らへの配慮は時として、マイナスの効果を生むことがあることを懸念している回答が目につく。彼らの特性、能力を発揮させたいという配慮からであっても、彼らがそのようなことを望まないなどの問題を含むものであることを指摘している。特に英語科や社会科などでの授業で、意図的に彼らの出番が与えられるようであるが、それを全面的に是とすることも一考する必要があるのではないかというものである。

生徒側から：

① 全体のレベルをあげることを主とすることへの疑問

一斉指導への不満は生徒側にもあった。例えば、研究授業などでは一クラス全体を対象にしたものであることがほとんどである。そうした中で、全体として盛り上がりのある授業になるかどうか問題にされる。

教師の意図した方向へ全体として生徒が反応し、教師の指導目標が達成されるように進められる。授業の流れからみて、生徒の特殊な考えはその授業の中で評価されにくい。あるいはその授業内容を越えてしまうような考えも、授業の進行上取り上げられにくい。

したがって、進んでいる生徒にとってはつまらない授業になってしまい、逆に自分が分からなくても授業は進んでしまうということへの不満である。能力や知識の差に関係なく、全体で同じ内容を同じ時間内で、同じ方法で学ぶことへの不満である。

② 知識の伝達

指導内容は学習指導要領によって定められている。今日、それを要領よく伝達することが授業であると思っている教師はいないと思うが、生徒には知識の伝達のように見えている。

わからないことを生徒も教師も一緒になって考える授業ではなく、教師が要領よく与えてくれる。それを覚えればいいというようになる。すなわち、生徒にとっては受け身的学習になってしまうというのである。

われわれは工夫して授業をやっているつもりでも、「与える教育としては最高」のような批判がでる。

③ 学習方法の指導

教師は生徒が今何を考えたらいいのか、どうすればいいのかを細かに指示してくれる。したがって、教師のいうことを聞いていれば心配はない。しかし、そうではなく学習の仕方、例えば資料の利用などについて指導して欲しいという指摘もある。

本校では最近、選択教科の中で学習の仕方の指導がされるようになってきている。

④ 学習環境と授業の評価

一斉指導を中心とする場合、クラスの雰囲気というものが学習効果を左右する。そのクラスは自由に発言できる雰囲気があったと答えているものもいる。このような公的なカリキュラムにはないが、それでいて学習効果に影響を与える要因であるものについては、潜在的カリキュラムの項で詳しく述べる。

考 察

① 学習スタイルの多様化と学習の個別化の問題

生徒を実際に指導してみるとわかることだが、40名程度の人数の授業では、どの教科においても生徒の理解の程度に大きな差が生じることを実感する。それを解消しようと様々な指導方法を工夫するわけであるが、結果的には中間的レベルに合わせた授業になってしまう。

すなわち、力のある上位の生徒と授業を理解できない下位の生徒への指導が行き渡らなくなる。どの生徒も一人の人間として、学習の場においても尊重されなければならないはずなのだがこうした事態になってしまうことに教師は悩むのである。

こうした事態を改善しようとして一斉方式の授業から、どの生徒も自分の能力に適した方法

で学習できるようにという学習の個別化が考えられている。しかし、主に経済的制約から一気に個別化は困難であることは明らかなため、次の手段として二人程度の教師で一つの授業を担当するチーム・ティーチング（T・T）が最近では研究されてきている。

こうした方法によって、これまでのような既存の構造化された知識の習得から自分で構造化していくような学習スタイルへと変えていこうとするねらいもある。

それでは経済的条件が整い、学習が個別化されれば問題が解決されるのかという問題はそれほど簡単ではないのである。

例えば、学習の遅れている生徒への放課後の補習授業、あるいは夏休みを利用しての補習授業は生徒に受け入れられにくい状況である。特別扱いを嫌うのである。

この個性化の問題について、佐藤学⁹⁾はアメリカの場合、「個性化」プログラムが意図とは逆に、学業成績の個人別の差異をも拡大し、人種間の格差も拡大する結果をもたらしていることを指摘している。

② 一斉授業の再考

日本の授業研究は、上記のような一斉授業の欠点を改善しようとしてきた歴史でもあると言えるかも知れない。どうすれば全ての生徒が学習内容を理解し、授業を意味のあるものにできるかを研究してきた。その根底には本来人間はみな能力において等しいという日本独自の平等観がある¹⁰⁾。

次に一斉授業は道德教育の観点からも支持されている。それは、分からない生徒がいたならば分かる生徒は先に進むのではなく、分からない生徒に教えてやるかあるいは分からない生徒がわかるまでまっていることをよしとする「おもいやり」が重視されるからである。そして全員で喜びを分かちあおうというのである。このような道德観はそれなりに意味のあるものである。したがって、このような文化的文脈を理解しないと、「日本の教育システムにおける明白な矛盾は、一方では個人間の競争を助長しながら、他方ではそうした個人たちに全体との調和の重要性を説き続けていることにある」¹¹⁾ というような指摘になる。

しかし、我々はこれを矛盾と見るのではなく、個人の能力を引き上げるためにときには競争も必要であり、そして全体の調和をはかることも必要と考えているのである。

その顕著な例が英語教育における帰国子女の扱いだろう。彼らを英語を全くの基礎から学習する一般の生徒と同じ授業に参加させているのも、こうした指導上の理念からでてきている。能力別に指導した方が効果が上がる。しかし、我々はときには彼らに待つことを求め、分からない生徒に手助けするように求める。特殊な能力を伸ばすために有効な指導方法も、全人格的な成長を期待するならば能力のある生徒の扱いも違ってくる。卒業生を見ていると、理解の遅い生徒とのつき合いがマイナスになっているようには見えないのである。

これはアメリカでの個別学習からの反省として、学校が学習を通して社会的な連帯を形成する場所であるという「学習共同体」¹⁰⁾の重視につながるものである。

また、一斉授業が日本人の創造性を妨げているといった理由も、世界に広まっているすぐれた日本製品を見ると、必ずしも適切なものではないだろう。

③ ディベート教育

最近の国際理解教育の中で最も注目されているのがこのディベート教育¹¹⁾であろう。本校で

は社会科の一人の教師が本格的に試みている。しかし、全体としてはまだまだ低調な取り組みとっていいだろう。

これからの国際化の中で、その必要性は誰もが認めるところのものであるが、やはりそれも金科玉条のごとく取り入れるものであってはならないと考える。

国際化の中で日本の独自の文化として国際的に評価されているものはどのような背景の下で生まれ継承されているかを考えてみると、そこには沈黙の文化というべきものがあるように思う。能あるいは歌舞伎、そして人間国宝などの日本の独自の文化はこの沈黙を背景とした文化であろう。言語だけが国際理解の手段ではないのである。

江戸時代、日本を訪れた外国人は地方の農村の日本人の品の良さを高く評価している。彼らは外国についての知識はほとんどなかったはずである。それでも同じ人間の本質を理解した対応がお互いに尊敬の念を持たせたと考えられる。それに反して、ほとんどの日本人が英語を学習し、多くの人が海外旅行ができる時代の今日、日本人の評価は決して高いものではない。

西欧の文化の表面的な受け入れは日本の国際的評価を高めるものにはならないであろう。

(3) 評価の対象化

アンケートの分析

教師側のアンケートからは評価についての直接の回答はなかった。間接的に個人差などの中で触れているに過ぎなかった。

生徒側から；

アンケートの項目3の「評価・評定について（定期テスト、10段階評定）」の回答を基にしてまとめる。

この項目では、かっこ内の用語のためか、通知表の10段階に関する感想が多く寄せられた。それでも、いくつかの評価・評定に関する参考となる回答もあった。

① 努力に対しての評価が欲しい

最も目を引いたのは、「自分の努力を評価して欲しい」というものであった。裏返せば、彼らは努力せずに高い評定・評価を望んでいないということである。

実技を伴う教科において、一生懸命やったが器用でないために低い評定であったことに不満を述べている帰国卒業生があった。

ところで、本校では通知表を10段階の絶対評価を基準としてつけている。基準というのは、「最頻値（モード）が7になるようにすること」という一応の取り決めがある。実際には、一年生の英語の評定あるいは技能教科に良くみられるようにモードが8以上になることもある。定期テストとその結果としての10段階評定に関してはほとんどが肯定的であった。

次に、数字以外での評価、例えば海外では小さな項目毎に＋、－での評価があり、自分の励みになった例をあげている。それは学習以外の面でも行われていたというのである。

本校では、通知表は教科においても観点別評価をしていない。そのためか、海外との比較で、もう少しきめの細かい評価をして欲しいという声もあった。

② 相対的評定の容認

附属学校といっても、本校のように高校への進学は受験による学校の宿命とも言える、相対評定に関心を持たざるを得ない。その辺の事情を生徒も良く理解しており、一般的には10段階評定を自分の相対的位置を知る上で必要なものと認めている。絶対評価が基本とはいえ、相対的な要因も含むのでそのような生徒には励みになったようである。

考 察

① 評価の個別化の問題

ここでも個別化が検討されなければならなくなるだろう。特に、教科においては上級学校への進学に縛られた、これまでの相対評価的なものから子ども自身の努力度、成長度などを加味した絶対評価、観点別評価的なものを重視する必要がでてくる。こうした評価の再検討は、これもまた今日的課題としての「観点別評価」に関連してくる。そこでは、学習への興味・関心、自ら学ぶ積極的な意志・意欲が重視される。

それと同時に、子どもの評価を左右するといわれる、子ども像、特に帰国子女像の再考が求められる。

学習およびそれ以外についても、きめの細かい評価法および短期的な自己評価などが学校全体として取り組んでいく必要を痛感する。

② 絶対評価と相対評価

本校のように高校への進学が受験を前提としている学校では、生徒は心の片隅で相対的评价を気にせざるを得ない。特に高学年になるにしたがってその傾向は強くなる。一人一人がどれだけ成長したかという評価の本来のあり方が、他との比較のために使われるようになる。

本校では既に20年以上前に教科に関しては10段階の絶対評定である。もちろん創立当初から受験の宿命を負わされていたが、基本的には絶対評定なのである。その意味では先駆的であったと言えよう。しかし、それもやがて、モード（最頻値）を7にするという制限が加わった。教科によってあるいは教師の主観的な判断によって9、10の評定の生徒が極端に多くなるようなことを避けるための方策だったのである。

絶対評価は教師の主観が入り、同一教科においても担当者が違うと生徒の納得のいく評価がしにくい。しかし、それが評価の本来の姿なのではないかと考えると、今後教科あるいは学校として検討していく必要がある。

教育行政の問題

絶対評価を徹底できないもう一つの理由は、やはり入試において高校へ提出する調査書にある。特に東京都の場合、相対評価を厳密に守ることが要求される。したがって、通常絶対評価をしていて、卒業の段階になって急に相対評価とすることは生徒への評定に対しての信頼を失う結果になる。現に、教科によっては10段階の8の成績が5段階の3または場合によっては2の評定になることもあり、評定に対する生徒の信頼を揺るがしかねないのである。高学年になるにしたがって相対評価に関心が向いていく。

本校に入学を希望する時点で、高校へは受験によることを知っている。そのため積極的に相対評価を利用している生徒もいる。自分の努力を評価してもらいたいという側面と、それだけ

では不十分であり、全体のどの位置に自分がいるのかを把握したいのである。それが本校に入学していることの意味でもあるというように。そのような生徒には、本校の評定は妥当なものであろう。絶対評価と相対評価を合わせ持っているからである。

イギリスの運動会では、成績に応じて現金を賞として与えることがあるという¹²⁾。我々の感覚からするとおおよそ考えられないことであるが、外国の教育といっても様々なものがあり、その文化的背景を十分汲んで参考にする必要がある。

一般に理想とされているような教育が海外で行われていると考えるのは早計であろう。

(4) 帰国生徒と一般生徒の相互啓発

今回の一般卒業生へのアンケートからも彼らが帰国生から多くのものを学び、大いに刺激を受けていたことがわかる。当然のこととはいえ、英語の発音の素晴らしさなどを賞賛している。その他、自分の考えをはっきり表現できること、物事に積極的に取り組むこと、視野の広いこと、海外への関心を高めさせてくれたことなどをあげている。一方で、どんなに頑張っても語学は彼らにはかなわないと感じるなど、ある種の挫折感を味わう生徒もいた。

本稿ではデータ不足もあり、相互啓発について十分な検討はできない。別の機会に混入方式における相互啓発について議論することになる。おそらく、帰国生を別クラスで構成している相互啓発¹³⁾とかなり様子が異なると予想されるのである。

本校での帰国生は一学年15名で、一クラス3～4名である。今回の三種類のアンケートおよび前回の本校教員へのアンケート¹⁴⁾などに見られるように、彼らを特別視しないことの必要性を主張する人が多い。

もちろん、英語科、社会科などでは彼らの活躍の場を与えたいと考えている教師もいる。しかし、大勢としてはお互いが意識することなく生活していけることを本校の理想のあり方と考えているようである。

5 本校の入試制度と潜在的カリキュラム

(1) 本校の入試制度

入試制度を避けて本校の生徒を論じることはできない。それは生徒をある一定のふるいにかかけ、一つの特異な集団を構成する役割を果たし、本校を特徴づける大きな要因となっているからである。これまで論じてきたことはすべてこうした一定の条件付けのもとでの現象であるといえるのである。

まず本校の生徒の構成について述べる。本校の生徒は、定員の約半数が附属の小学校から連絡進学という形で受験をせずに入学してくる。そして、残りの半数が帰国子女の15名と主として他の公立小学校からの入学者である。

附属小学校からの入学者は連絡進学とはいえ、すでに小学校への入学時点で受験を経験してきている。小学校での六年間の教育過程において彼らの中で学力差などが大きくなっている。6歳での選抜であることから当然のことであろう。しかし、入学後学年の半数を越えるその集団はいろいろな意味で大きな影響を及ぼす。

そして、公立を中心とした小学校からは、国語、社会、算数、理科の4教科の試験を受けて

入学してくる。実質の合格倍率は4～5倍程度である。近年の私立指向もあって合格者全員が入学してくるわけではなく、合格しても入学を辞退する生徒も少なくない。

また、帰国子女に対しては一般と同じ国語の筆記試験と親子との面接で合格者をきめている。近年応募者は増加の傾向にある。平成7年度の場合、合格倍率はおよそ6倍であった。

帰国の入試の場合、筆記試験は国語だけということからも分かるように、他の学力は海外の小学校での調査書を参考にしている。したがって、日本の学校とはカリキュラムも異なるため、未習内容もあって入学してくる。また、日本語の能力が一般生徒に比べてかなり劣る生徒が入学してくることもめずらしくない。

(2) 潜在的カリキュラム

本校の帰国生徒があまり問題もなく生活、学習に適応し、その能力を伸ばしていく背景には本校が上記のような生徒によって構成されていることを見逃すことができない。

まず、帰国生として本校に入学を希望する者は、自分達を帰国生として特別クラスを編成して指導することはなく、附属小学校からの入学者および一般受験での入学者の中で教育されることを知っている。したがって、応募の時点で本校での教育を受けようとする決意があるはずである。すなわち、彼らは本校を選択しているのである。

そして、入学すると他の子ども達の学習意欲、物事の考え方などに触発され一層自分を向上させようと努力する。一般生徒の存在がいわば潜在的カリキュラム¹⁹⁾として機能するのである。もちろん彼らが我々教師との関係の中で無意図的に学習していく側面としての潜在的カリキュラムの影響も見逃すことができない。それについてはアンケートの「本校の教師像について」からも読みとることができる。

いずれにしろ、帰国生が本校の教育に満足している面があるのは、混合方式あるいは入試制度など本校のさまざまな要因が背景にあるのである。

Ⅲ 総合的考察と今後の課題

1 帰国生の教育問題と本校の教育改革

これまで主に、帰国卒業生のアンケートの分析を通して、本校のカリキュラム、教授、評価について検討してきた。これから直ちに分かることは、帰国生の教育問題は日本の、そしてわが校の教育問題とほとんど同一のものである。

すなわち、帰国生にとっての障害は一般生徒にとっても障害となるのであり、彼らにとって有効なものは一般生徒にとっても有効なものなのである。

例えば、知識習得型の学習様式が日本の教育の特徴として批判されるが、これらは何も帰国生の関連において生じてきたものではない。数学教育においては、すでに知識構成型の授業が提唱されてから久しい。

また、厳しい校則、生徒指導などもそれなりの社会的背景があったのである。その背景が変わってしまってもそのまま残っているものは検討する必要がある。

こうした問題も含めて、社会の変化、国民の意識の変化の中で地球的視野でのこれからの子

どもたちの教育を考えていく必要がある。

いろいろな能力を持った子ども、個性を持った子ども、ハンディを持った子どもに配慮した教育はみな帰国子女教育につながるものである。

2 教育の独自性と国際化

国際的な視野に立って教育改革を試行していくことは全く正しい。しかし、それがともすれば明治以来の西欧コンプレックス的なものになってはならない。日本の教育が外国から評価されている事実¹⁶⁾もあることを認識する必要がある。また長年、日本語を研究し、その言語研究から世界の文化を理解しようとしてきた鈴木孝夫の次の指摘は今後の教育改革において傾聴に値する。

「いま私たちが身をおく国際化の時代とは、所与として外から与えられた世界に、日本がどう対処したらよいかということよりは、世界を改めて自分の立場、日本人の立場から考え直し、整理し直す積極的な努力が求められる時代だと思う¹⁷⁾」

戦後の荒廃から立ち直った今日の日本の繁栄の背後には、教育の貢献があることは誰もが認めざるを得ないであろう。今日、教育の危機が叫ばれているが、むしろ一つの転換期と考え、新しい教育の創造に努力することが肝要である。

これまでの教育のあり方を、地球的な観点から反省し、検討するとしても日本の独自性、文化を根本に据えるのでなかったら、かえって世界のひんしゆくを買うに違いない。

「これからの20年ないし30年は、(中略)国際交流が進むと同時に、それぞれの地域における土の匂いにみちたものが信仰として大きく強調されてくる。したがって、『地域主義』と『国際化』が、同時に成り立って進んでいく」であろう¹⁸⁾。

近森¹⁹⁾は、「教育の国際化を考えると、海外での教育体験と日本の教育との連続性を保つことが必須の条件である」とし、それは「すなわち、海外の教育のあり方と日本の教育のあり方とに共通性がなければならない」といっている。さらに「このような帰国子女の特性が、帰国してからも日本の学校教育で保持・伸長されるためには、従来の日本の学校教育を再編成しなければならないのである」という。

ここにみられるのは、海外の教育それは欧米の教育であろうが、それは理想の教育であり、誤った日本の教育はそれを受け入れるように再編成されなければならない、と考えているようである。それぞれの国にはそれぞれの文化があり、教育がある。わが国の学校はあたかも帰国子女の受け入れのために存在しなければならないのだろうか。

それぞれの国にはそれぞれ特有の教育があり、内容において、その方法においても異なっているのが当然である。しかし、その特殊性の中においても人類に共通した教育を考えることができる。それは人権を基本とした共生・共存などであろう。

先にみたように個性化教育あるいはディベート教育なども全く無条件に取り入れられものではないのである。現状を踏まえ、世界に目を見開いた教育改革を目指すことが肝要なのである。

3 今後の課題

本校を退官し、現在静岡大学の教授をしている岡本光司氏は同窓会誌に本校を「楽園」ということばで表現していた。ある種の郷愁の念もあってのそのような表現となったのであろうが、確かに「楽園」と呼んでもいいような面がある。それを裏付けるかのように学校が楽しいという生徒が実に多いのである。それは教師側においてもその通りである。こうした明るく自由な校風は帰国生にとっても快適なものなのであろう。

しかし、帰国子女教育を参考としながら、次のような教育内容に積極的に取り組む必要もあることがわかる。

- ① 生徒の個性に配慮したカリキュラム、授業、評価の検討
- ② 環境教育などの新しい教科の設定とこれまでの教育内容の扱いの検討
- ③ 一斉授業の再評価
- ④ 本校の伝統と教育の国際化との調和
- ⑤ 教科外活動の再評価

謝 辞

最後になりましたが、全項目記述という今回のアンケートに詳細にお答え頂いた卒業生の皆さまに心から感謝いたします。貴重な資料として今後さらに活用させていただきます。

研究協力者	研 究 部	西原口 伸一
		鈴木 健一
		阿部 眞士
		平賀 伸夫
		塩野 恵
		楠部 知佐子
	副 校 長	松下 剛

引用および参考文献

- 1) 大橋清水他「普通学級編入方式の海外帰国子女教育」本校紀要, 第16号, 1977, pp. 3-19
- 2) 竹内博他:「本校帰国生徒の学習適応に関する実態の分析」, 本校研究紀要, 第17号, 1978, pp. 103-125
- 3) 竹内 博:「帰国生徒の生活の適応について」, 本校研究紀要, 第18号, 1979, pp. 99-111
- 4) 本校研究紀要, 第30号, 1991, pp. 70-85
- 5) 佐藤郡衛:「国際理解教育の実践上の課題 —学校・学級の構造とのかかわりから—」日本国際理解教育学会創刊号, 創友社, 1995
- 6) 佐藤郡衛:「カリキュラムの社会学的研究の現状と課題」日本教育方法学会紀要「教育方法学研究」第10巻, 1984, pp. 101-108
- 7) 佐藤 学:「「個性化」幻想の日米比較」『教育』, 1994年8月号, pp. 37-45
- 8) 恒吉僚子:「人間形成の日米比較」, 中公新書, 1992
- 9) R. グッドマン:「帰国子女」, 岩波書店, 1992, p. 40
- 10) 上掲 7)
- 11) 渡部 淳:「グローバルな課題と学習の転換」, 『教育』, 1994年8月号, pp. 28-36
- 12) 鈴木孝夫:「日本語と外国語」, 岩波新書, 1995, 第16刷, p. 113
- 13) 佐藤郡衛他:「帰国子女と一般児童・生徒の相互啓発の教育に関する実証的研究」マツダ財団研究報告書, 第7巻, 1994年, pp. 67-82
- 14) 上掲 4)
- 15) 上掲 6)
- 16) W. エンロー;「世界から注目される学校—日本—」, 二宮皓編著:「世界の学校」, 福村出版, 1995, pp. 225~235
- 17) 上掲 12), p. 203
- 18) 木村尚三郎:「現代人の心と価値観」, 村上陽一郎編「心のありか」, 東大出版, 1989, p. 256
- 19) 東京学芸大学「異言語・異文化体験児童・生徒の増加にともなう学校教育の課題とその対応策」にかんする調査研究報告書, 平成5~6年度, 教育研究学内特別経費によるプロジェクト, 1995年,

資料1

卒業生へのアンケート (帰国生)

卒業年 昭和, 平成 () 年 3 月
海外在学年数 日本人学校在籍年数 () 年 () カ月
現地校 在籍年数 () 年 () カ月

以下の事項について、海外での体験などと比較して、本校の教育活動に対するご意見をお聞かせ下さい。

1. 授業内容について (水準, 進度など)
2. 教授・学習方法について (学習スタイル<一斉授業, グループ学習>, クラスの雰囲気, 自分の方)
3. 評価・評定について (定期テスト, 10段階評定)
4. 学校行事について (校外学習, 運動会, 弁論大会, 文研など)
5. 学級の雰囲気, クラブ・部活動, 校則について
6. 本校の教師像について
7. その他お気づきのことがありましたら, お書き下さい

資料2

卒業生へのアンケート (一般)

卒業年 昭和, 平成 () 年 3 月

1. 帰国生を意識するのはどのような場面においてでしたか。
2. 帰国生から学んだと思われることはどんな事ですか。
3. 帰国生に対して一般生徒が配慮すべき点はどのようなことだと思いますか。
4. 帰国生に対して学校および教師が配慮すべき点はどのようなことだと思いますか。
5. その他お気づきのことがありましたら, お書き下さい。

資料3

帰国子女教育に関する アンケートのお願い (教官)

1. 帰国生を受け入れていることによって、あなたの教育観あるいは子ども像はどのように影響を受けたと思いますか。
2. 帰国生を受け入れていることの教育的影響は、本校のどのようなところでできていると思いますか。
3. 帰国生を通して知った中で、本校の教育と対比して、海外の教育の良さがありましたら、具体的にあげてください。
4. 帰国生を教育する中で、海外の教育と対比して本校の教育の良さと思われるものがありましたら、具体的にあげてください。

資料4

卒業生へのアンケート集計結果 (帰国生34名)

1. 授業内容について ()内の数字は人数

- ・英語以外の教科の勉強法がよくわからない (1)
- ・英語は簡単 (何らかの措置を) (4)
- ・水準、進度とも良い (高い) (13)
- ・本質的な学問を行なっている (2)
- ・書道や音楽は帰国子女には大変 (2)
- ・質の高い授業内容 (8)
- ・常識といわれる内容 (社会、理科) がわからない (2)
- ・教科により能力別クラスにすべき (2)

2. 教授・学習法について

- ・海外とは教授法等も違うが、予期できる範囲である (2)
- ・与える教育のスタイルでは最高レベル (2)
- ・問題発見、問題提起、調査、発表などの能力をのばすことを個人にまかせる (3)
- ・大きなテーマと視点でのレポートを増やしてほしい (5)
- ・グループ学習をもっと取り入れるべき (4)
- ・記憶力を試すテストが主体
- ・知識の伝達になっている
- ・各教科に独自の雰囲気がある
- ・宿題なしで個人の学習にまかせるスタイルは良い (2)
- ・全員同じ学習内容で個々に応じた指導がない (2)
- ・受け身的、先生のワンマンショー
- ・発言しやすい場が多い
- ・優秀な生徒が多い (3)
- ・全体のレベルばかり意識して、個性をつぶしている (2)
- ・競争意識が苦痛
- ・クラスの雰囲気は良い (4)
- ・帰国生と他の生徒との区別があまりないのが、学習にはかえって良い (2)
- ・先生も生徒も積極的

3. 評価・評定について

- ・特に問題はなし、適している（４）
- ・10段階評定は厳しい（２）
- ・曖昧な評定からやる気をなくすこともある（４）
- ・テストの評価によって、正しい勉学の仕方を身につけられなくなる
- ・目の小さな目標のために大切なことを見失ってしまう
- ・レポートを提出させ、「努力に対する評価」「勉強の姿勢に対する評価」も行なうべき（３）
- ・定期テストはレベルが高く、良い問題（塾でする受験問題と違う）（４）
- ・成績のつけ方は、細かく、分かりやすい（５）
- ・10段階評定は公正（生徒の頑張りが教科対象）（７）
- ・アメリカでは生徒を他人と比較して評価することはなかった
- ・アメリカでは生活の局面における（感情コントロール、整理整頓）評価が多く注意書きの欄が大きく設けられており、教師が細かく記す
- ・テスト以外にも評価してくれるのは良い（２）

4. 学校行事について

- ・海外では学校行事がなかったため、新鮮で楽しかった（５）
- ・運動会が楽しかった（クラス全体の協力）（３）
- ・自由研究が高度ですごい（３）
- ・アカデミックな気配
- ・理系・文系、プレゼンテーションといったいろいろな側面からも評価を与えるべき
- ・学校全体が団結することは、海外ではあまり体験できないので良かった（８）
- ・社会性の薄い日本の学校において大変貴重なこと
- ・クラスメートとなじむ機会（６）
- ・合唱コンクール（協力、真剣、気合い）（３）
- ・校外学習はすばらしい経験（春は特によし、興味分野広げる、友情）（８）
- ・弁論大会（ユニーク、自分の意見の大切さ、満足できる内容）（３）
- ・生徒の自主性が尊重される（５）
- ・運動会の入場行進と整列はくだらない
- ・遊びだけの行事をするのはどうか（X'mas, Halloween）
- ・文研を通して物事の調べ方を学べた

5. 学級の雰囲気、クラブ・部活動、校則について

- ・校則は厳しくなく、自主性に任されていて特に問題はなかった（31）
- ・登下校中の飲食を禁止する理由がわからない。反道徳的行為をすれば怒られるのは当たり前だし、注意しても禁止することはない
- ・校則にはなじめなかったが、他の学校に比べればかなり自由

- ・制服は個性を尊重するならないほうが良い
- ・部活の参加率が高い。上下関係がなく打ち込めて楽しかった（8）
- ・上下関係にとまどった
- ・学級の雰囲気はまとまっている、とても良い
- ・先生と生徒のなかが良い
- ・学級はグループに固執しがち
- ・学級の雰囲気は現地校にちかく、個性を伸ばしやすい（5）
- ・個人よりクラス単位の行動評価を重視
- ・男女の仲がとても良い
- ・帰国子女の差別、特別意識がない
- ・専門カウンセラーの設置

6. 本校の教師像について

- ・あたたかい（3）
- ・丁寧な指導（10）
- ・生徒思い（5）
- ・良き人生の先輩
- ・信頼できる（5）
- ・個性的（3）
- ・尊敬できる（2）
- ・放任主義のスタイルをとっていて、バランスが良い
- ・授業にポリシーやプライドがある
- ・研究に打ち込む姿勢
- ・勉強のおもしろさを伝える
- ・遠くからいつも見守ってくれる
- ・英語の授業で邪魔者扱いされない
- ・自分と異なるものも受け入れてくれる
- ・何でも相談できる
- ・プライドが少々高かった
- ・体罰がない
- ・押しつけがない
- ・熱心、意欲的
- ・生徒を信頼、尊敬している
- ・寛容な方多い
- ・卒業後も会いやすい
- ・すばらしい教師のあつまり

7. その他

- ・帰国生受け入れ体制には問題なし（3）
- ・竹早中は自立の学校で、そこが良い
- ・宿題がなかったのが良かった
- ・竹中の存在は、良き人材を作る点で価値がある
- ・アカデミックに優れた人材を作る責任がある

- ・授業の進行に合う意見を生徒から導き出している
- ・帰国子女が特別視されないのが良い
- ・一般生と別の課題がほしい
- ・帰国子女に対しての第2言語的な授業がほしい
- ・帰国子女が十分力を発揮できる学校（5）
- ・帰国生、一般生の混合はお互い刺激になり、いい影響を与えている（6）
- ・帰国子女を一人でも多く受け入れ、他の生徒の国際理解を深めてほしい
- ・文研で帰国子女コーナーを設けて、各国の紹介をするのはどうか
- ・アメリカの現地校に雰囲気似ていたので、溶け込みやすかった（2）
- ・海外では中学生はかなり自立した人間として扱われる
- ・様々な方面に自由に生徒が自分の考えをふくらませる余裕が必要
- ・皆、附属高校に流されがち
- ・アメリカの人間関係はGive and Takeだが、日本文化は「隠す」
- ・パソコンをもっと使ってほしい
- ・帰国生はいじめられると聞いて心配だったが、そんなことはなかった
- ・教育実習生ははじめとまどったが、後に出会いも含めて楽しみになった（2）
- ・「いじめ」が問題になっているが、いじめる側のこともきちんと考えたほうがよい。いじめは断じて許せないことだが、いじめられる側だけでなくいじめた側の方にも人権がある。きめつけてほしくない
- ・帰国生には帰国生の悩みがある

資料5

卒業生へのアンケート集計結果 (一般生14名)

1. 帰国生を意識するのはどのような場面においてでしたか。()内の数字は人数

- ・自分の意見をしっかり言う時 (5)
- ・英語の時間の音読の時 (11)
- ・行事でリーダーシップを発揮する時
- ・物事に対する認識が違うと思った時 (2)
- ・プライベートな面での考え方や行動を共にした時
- ・自己主張を激しくやられた時
- ・学業以外の才能を見た時 (音楽、Dance等)
- ・意見等をはっきり言う時もあるが、これは人によりけりだった

2. 帰国生から学んだと思われることはどんな事ですか。

- ・自己表現の大切さ
- ・冷静さ
- ・自分の意見をしっかり持つこと
- ・英語の発音 (2)
- ・外国文化 (価値観、生活様式) (3)
- ・物事に積極的に取り組む姿勢 (2)
- ・自らの個性を明確にする点
- ・用心深さ (日本の社会に対して慎重な様子を見て、日本の社会はこういうふう外国から見ると、用心深くしないと生きられないところだと感じた。)
- ・素直さや信頼 (私の友人はそういうものをつき合いを通して教えてくれました。文化のちがいから、日本人同士では学びとれないことまで教えてくれたような気がします。)
- ・視野の広さ、心の広さ (2)
- ・世界がとても身近に感じられた
- ・特に意識したことはない

3. 帰国生に対して一般生徒が配慮すべき点はどのようなことだと思いますか。

- ・普通にしていれば良いと思う (帰国生はあまり「帰国」ということを強調されたくないと思っているようだったので) (外部生が附小からきた人と親しくなるのと同じ) (10)
- ・帰国生の良いところを吸収しようとする姿勢をもってほしいです
- ・日本語が不自由であったりしたとしたら、followすべきではあるが、そこまでの人は多分

いなそう

- ・普通の日本人と違うところをわかってあげること
- ・あたりまえと知っていることを知らなくても、笑ったりしないで教えてあげないといけな
いと思う
- ・帰国生だからといって英語の発音を期待するような言動は良くない（海外生活が短い）
（英語圏ではない帰国生もいる）（3）

4. 帰国生に対して学校および教師が配慮すべき点はどのようなことだと思いますか。

- ・帰国だからといって特別扱いしないこと（6）
- ・「帰国」のよさを生かすべき（英語の時の音読、社会の地理などで負担をかけないように）
（2）
- ・一般生徒が帰国生をねたみの対象としてではなく、目標としてとらえられるような教育を
すべき
- ・自己主張が強い面があるので、その辺のところを配慮すべき
- ・英語圏以外の帰国生に対して引け目を感じさせず、自信を持たせるよう配慮すべき
- ・入学してから3カ月くらい月1回くらいのペースで面談をしてあげてほしい（2）

5. その他

- ・竹早中の雰囲気よかったのか、帰国生と一般生徒はあまり隔たりがなくつきあっていけ
てる気がします。それはそれでとてもよいことだと思いますが、そのまま終わっている
ようで少々もったいない気がします。もっと帰国生に対して目的をもったつきあいをすす
めていったら、帰国生受け入れの意義が広がると思います。
- ・多くの帰国子女の人の勉強に対する態度がとてもいいと思っていた。（自分でやろうとす
る）そこをもっと一般生徒に求めるといいと思う。
- ・同じ教育を受けさせるようにすることはとてもいいことだと思う。
- ・帰国生がいなかったら、竹早はガリ勉の最悪の学校に思えたかも知れません。のびのびと
した勉強一辺倒でない雰囲気に欠かせない存在と思います。
- ・せっかく世界各国からの帰国生がいるのだから、外国のことをもっと知りたい。
- ・帰国生も日本人であり、特に問題はないと思う。
- ・帰国生がいたほうが学校生活は楽しいです。（2）

帰国子女教育に関するアンケート集計結果 (教官15名)

1. 帰国生を受け入れることによって、あなたの教育観あるいは子ども像はどのように影響を受けたと思いますか。

- ・帰国生の発表意欲の旺盛さなどから、日本の教育について多角的に考える環境を与えてくれたと思います。
- ・自立して生き抜いてきたたくましさ、自分の感情や考えをはっきり述べる行き方にすごい力を身につけていると感じました。一方、その度が過ぎると、自己主張ばかりの個人主義すぎる子どもが自分としては、受け入れられない面を感じます。
- ・現地校出身者には個性的な子が比較的多いのではと思う。clubや委員会等で燃える子が多いかなと思う。教育観まで影響を受けたか、それは何とも言えない。受けたような気もするが明言できない。バラまき方式のため竹小、外部、帰国と意識したくなかったから。帰国生は多少気になった気もする。
- ・個を生かすことの重要性をさらに知った。帰国生は一般に自己表現がうまい。
- ・帰国の子どもたちがもっている積極性を今までの自分たちの指導では育てられないのではと考えさせられた。
- ・基本的には変わらないが、積極性や表現力をもった帰国生を多く見るにつけ日本の社会や学校教育の問題点がよりはっきり見えてくるという確信を強めた。
- ・国がかわれば教育もかわるということを実感した。子どもの学習スタイルの多様性を認めていく必要性を感じるようになった。今後は世界を視野に入れた教育を考える必要があると思うようになってきている。
- ・すべての子どもたちが同じ内容の、或いは同程度の教育を受けてきているわけではないことを改めて強く感じ、個に応じた教育の充実を図ることの重要性を再認識するに至った。在留国の事情によって、子どもたちの人間観や人生観が形づくられており、なかには望ましくない（少なくとも日本人社会では）ものもあり、残念な思いも抱いた。
- ・特に影響を受けたとは思わないが、改めて日本の受験体制が及ぼしている国内の生徒への悪影響を思い知った。勿論日本人学校出身生徒へのそれも含めてであるが。
- ・もともと確固たるものが無いので、どのような影響があった（ある）のかについて語るべき材料がない。ただ、人は環境の動物であるという点について深く再認識できたかもしれない。
- ・帰国生のいわゆる特性を概念化された枠内で決めつけてしまう個を逆に無視してしまう危険性を感じた。
- ・20年前に受け入れた時に大きな影響を受けたと思います。現在では、帰国生がいるのが当たり前で、外部生の変化による影響の方が大きいと思う。
- ・他文化に早くから接している子どもは、好奇心、向上心等により影響を受けているように

思われ、よって、幼児期より何らかの方法で数多くの外国文化及び、外国語に触れさせる機会の必要性を強く思うようになった。

- ・異文化を改めて認識した。例) 水泳ができない→プールがない。生活習慣の違い→疑問に思わないことが帰国生にとって疑問である→日本の文化を再認識することができた。
- ・日本では体験できないようなことを経験した生徒がいて、色々な話を聞かせてもらった時に感動を得たことがあった。
- ・特に変わりません。

2. 帰国生を受け入れていることの教育的影響は、本校のどのようなところでできていると思いますか。

- ・海外のことに対して日本人が今まで以上に身近かに受けとめられる環境や雰囲気をつくり出したのではないかと思う。
- ・生徒や教師が国際理解をいやおうなしに関心をもたざるを得ない。
- ・授業では、一般生徒に海外の生活等について実感をもって考えさせる手助けになっていて、子どもたちどうしの学び合いに役だっている。生徒会活動・クラブ活動でも彼らの積極さは様々な良い刺激を与えていると思われる。
- ・授業あるいは行事等を通して帰国生以外の生徒に影響をあたえる場面が多いように思われる。活性化につながる。
- ・教科、生活、行事等を通して、積極性や発表力を発揮し、生徒たちに良い刺激を与えている。
- ・3分間スピーチになると「英語で話せ」と希望があれば帰国生は英語でスピーチしたり、実習生への初めの挨拶で英語でclassの紹介をしたり、また自分の教科で英文が出てくると読んでもらったり、キャンプファイヤーでは各国の言語で挨拶してもらったり、ごく自然に1つの個性・特性として認め合い、classに友人になじんでいると思う。
- ・直接的には、世界地理分野で体験を含めた生きた教材を提供してくれる（特に、A. A諸国よりの帰国生）ことで偏見の除去に有効だったり、豊かな認識をさせる上で効果がある。帰国生が持つ、未知なことへの積極性や自己主張できることが、授業や行事・委員会活動に活力をもたらし、他の生徒への好影響を与えている。
- ・英語の授業に関して言えば、特に1年の授業では、教師の手足となって活躍している。一般生徒にも良い影響を与えている。
- ・まずは、学習時における発言力が他の生徒にも良い影響を与えている。また、委員会活動・部活動等における積極性、弁論大会等での活躍ぶりを見て、行動力・表現力の豊かさを感じざるをえない。
- ・それ以前の生徒たちの様子がわからないが、子どもたちが全体として明るく活動的で男女の仲が良いという雰囲気に大いに貢献しているのではないかと思われる。また、彼らを受け入れたこと、その中に日本語習得が不十分な子どもがいたために、授業中の説明の用語や、話し方、話す速度などを意識するようになった。このことは一般の生徒に対しても意

味あることになったと思う。

- ・特に外部生への影響が強いと感じる。というのは、潜在的には積極性やリーダー性をもっているながら受験期の生活でかかわろうとしなかったことを活力をもって行動したり、経験を生かした考えを示すことで刺激になっていると思う。また、英語を教えたり習慣などを話したり、逆に漢字や分からないところを教えてもらったりして交友関係にも影響があると感じている。国際理解や異文化への感心も彼らがいってこそ高まる部分もあると確信している。

(帰国生だからこその他の生徒に素直に受け入れられる言動も子どもの間では多少なりともあるのではないかと思います。)

- ・日本国内での教育しか受けていない生徒にとっては、発想や行動の面で何らかの影響を与えていると思うが、帰国生側には帰国生に見られないよう行動しようとする傾向も見られ、マイナス面でもあるように思える。
 - ・特に影響はないように思えます。帰国生を特別視しないことを方針としている本校の受け入れは、そこが評価されているところなのではないでしょうか。
 - ・受け入れ以前が分からないので、よく分からない。むしろ帰国子女が1学年15名もいることが、感じられない場合が多い(もちろん大例外はあるが)ことに不思議を感じている。
 - ・帰国生との会話を通して、日常生活の中で生徒達は影響を受けているようだ。私の教科においてはなかなかない。
 - ・身につけた力の評価はなされないものが多いが、「個性豊か」という言葉を実感しました。そしてその人達を感覚的に受け入れる素地が広がったと思います。
3. 帰国生を通して知った中で、本校の教育と対比して、海外の教育の良さがありましたら、具体的にあげてください。

- ・積極性を海外の教育ではしっかりと育てていると思う。
- ・一人一人の学習スタイルを尊重している。学力以外の教育を重視している。外国人子女を国の責任において学校に受け入れている。
- ・これは主にU. S. A. のそれだろうが、発表力(レポート、口頭)があること。それ以外にも多々あろうが、我々の努力が足りないかもしれない。日本の教育について海外と対比した実践的研究活動を考えてもいいのではないのでしょうか。
- ・(帰国生から聞いたなかからであります)授業スタイルが工夫されているというか、ユーマであることがおおい。個別学習が多かったり、自由である。芸術や文化に対してのこだわり(価値観)がある。
- ・積極性、発言力は学ぶべきところと思う。レポート作成や調査と発表といった学習方法は、時間や学習定員数の制限もあるが、取り入れたい。
- ・サッカー部に上手な生徒がいた(帰国生で)どんな練習をドイツでしてきたのか聞くと、決められたメニューはなかったという。遊びの中で上達していったと言う。日本では決められた指導の手順通り教えているが、外国は自由に遊ばせる中で指導の要点を見つけ、個に

応じた指導があるのかなと思った。これが一番大きな印象である。のびのび、ゆったりとしていますが、しかし何かに頑張る子、行動力があるのではないだろうか。

- ・一学級での生徒数の少なさ。自己学習・自主学習ができる教育環境（教材、人数、施設）
 - ・授業数が少ないこと、生徒数が少ないこと、男女の仲、人と人との関わりが楽しいとの話をよく聞く。（特に現地校などで）
 - ・学習の仕方、学習スタイル、学習観において個の伸長に重点がおかれ、受験的な方法論に偏っていない。（もちろん地域差はあろうが）全体的に言えるであろうことは、学習の知識を教えることに終始せず学習の知恵を学ばせる点であろう。
 - ・日本はとかく一斉指導に教育が行なわれることが多いが、海外の教育は個性伸長、個性重視の教育が行なわれている。
 - ・体験学習が多いということ。書物からの知識も必要であることは当然であるが、体験を通じた知識には自信や確固たる信念というものが感じられる。海外はゆっくり大きく教育しているなあと感じる。
 - ・よくわからないが、彼らの目の高さに立って指導しているように聞いたことがある。個人差も大きいであろうが、教師が非常にパワフルで勉強家であるという例も聞いた。
 - ・本校にも本校なりの良さがあったし、海外にも海外の良さがあると思います。時代とともに子供も教師も変化していますので、本校の良くないところや、海外（個人？）の良くないところも多く見られるようになり、単純な対比はできません。
 - ・帰国生を通して知ったとなると、同じアメリカでも個人によってそれぞれちがいますので、これがたとえばアメリカの教育とはいえません。したがって、良さと言うものを感じとるまでにはいたっていません。違いはいくらかあります。
 - ・直接帰国生から体験を（具体的に）聞いたことがない。
4. 帰国生を教育する中で、海外の教育と対比して本校の教育の良さと思われるものがありましたら、具体的にあげてください。
- ・「本校の」ということではなく、集団の中でどう行動すべきかや他人に対する思いやりという面では日本の教育のほうがすぐれていると思う。
 - ・余り意識しないが、一般生にとっても良い点と同じだと思う。たとえば、
 1. 自主性を重んじ、生徒の意欲を組織する生徒指導・行事
 2. 自主的な学習姿勢、自由研究を求める姿勢など
 - ・特に顕著なものはなかろうが、「本校の」といえば、学校行事での生徒主導の活動があげられそうです。
 - ・教科指導において教師の質がよい。
 - ・実験などが多くて良いという意見をよく聞く。
 - ・教官・生徒ともに、帰国生を特別視していないという点は大変いいことだと思う。良さではないが、むしろ、もっと帰国生の持つよさを引き出し、いろいろな場面で活用できればなおよいと考えます。

- ・帰国生の体験を尊重しているというか、帰国生のよさを共存させてのばしていこうとする雰囲気と、帰国生だからと特別視しないで一般生と同じように扱う雰囲気が良いと思う。
- ・海外といっても各学年15名であり、国による差、学校による差等同じレベルで比較できないものです。異質なものを少しは認められる（←帰国生のいない国内の学校と比べれば）くらいで、海外との比較は不可能です。
- ・3. との関連で、これが海外の教育というものを一概にいえませんので、それとの対比といわれても対象がないので答えようがありません。
- ・学校の教育環境というより、国による社会全体の違い（メリット、デメリット両方）を感じ、そして考えさせられることが多い。
- ・良さは見えない。枠にはめられ、あわただしい生活・学習環境、子供達が自然に自らスクスク成長するような教育ではない。
- ・大自然の中でのんびりゆったり育ってきた子、厳しい環境の中でたくましく育ってきた子、海外の学校教育+それ以外の貴重な教育を受けてきた子どもたちである。（全員ではないが）本校の教育と対比することは困難である。
- ・校則にも現れているように竹中の規則が社会化へのプロセスであることをしめしている。規則のみによらず、行事・生徒活動・授業においても生徒の自主性を重んじている。四角四面でないところが帰国生が生きる要素であると思われるので対比することは困難であっても本校の教育の良さと考えられる。
- ・海外の学校の実情がよくわからないので、何とも書けません。
- ・現在のところわかりません。申し訳ありません。
- ・申し訳ありません。「海外の教育」の実情がよくわかりませんので書けません。

その他

- ・これまで帰国生について意識はしていなかった。が、頭を整理して帰国生の卒業生を思い出す中で、帰国生はすごい子がいたんだと感じた次第です。改めて帰国子女教育の重要性を認識しました。よってアンケート項目1. 2. 3. 4. とありますが、記載した内容に自分でも認識の変化を感じることができます。あえて修正いたしません。